

被災地を修学旅行先に選んだ、ある高校の勇気

昨日で大震災から1年2ヶ月。

昨日の朝刊の新聞に、東京のある高校が修学旅行で南三陸町を訪れ、被災者の「語り部ガイド」の案内で被災地を回った記事が載っていた。

先に当HPに「被災地復興のためにも、東北観光を！（HP「雑学BN」の随想等関係（IX）、2012.4.29.：参照）」を掲載しただけに、修学旅行先に東北を選んでくれた高校に感謝したい。

言葉や映像で次世代の若者たちに語り伝えるよりも、感受性豊かな生徒たちにぜひ修学旅行などで被災地を訪れ、肌感覚で被災状況を実感し、被災されら方々を思い遣る心を育てて欲しいと願っていた。

放射能汚染や余震による津波の不安を口にする保護者もいるだろうなあと容易に推測できるだけに、こうした勇気ある高校があったことが嬉しい。

新聞記事によると、やはり不安を寄せる保護者もいたようであるが、教頭が被災地女川町出身であったこともあり、「現場に行かなきゃ、現実は分からない」と、生徒に現場に足を運ぶ意義を説明し、更に、保護者向けにも質問会を設けるなどして、多くの理解を得ることが出来たという。

新聞記事にはある生徒の「テレビやインターネットと違い、がれきの山を見ると、リアル感がすごい。ひとごとみたいな感覚だったが、人々は本当に苦しかったんだろうと思った」との感想も紹介されていた。

この生徒の感想に象徴されるように、TV等の報道で知る被災状況よりは、被災地を訪れて実感することの方が、生徒一人一人にどれだけ勉強になるか計り知れない。

だがふと思ったのだが、この高校は私立高校であり、しかも教頭の故郷が被災地であったこともあり、教師集団の被災者への熱い想いが被災地への修学旅行実現の希なケースであり、新聞記事にもあったが「今の教育現場では、数%でも反対の声があると、及び腰になってしまう」ことから推測すると、もし公立高校であれば実現したかどうか…。

一校でも多く、修学旅行先に東北の被災地を訪れる中学校、高校が増えることを願う。